届け１０２４個のランドセル

本学学生が東日本大震災被災地へ

本学環境教育研究センター（中山智晴センター長）に所属するコミュニケーション社会学科（４年生は「共生社会学科」）の学生を中心としたメンバーが、東日本大震災で被災した子どもたちのために「ランドセル大作戦」を企画。ふじみ野市教育委員会・総合政策室と連携し、市内13の小学校の校長先生方の協力を得て、１０２４個のランドセルを回収しました。

４月５日、小学校13校を次々と回ってランドセルの回収をした学生たち。１０２４個のランドセルをピカピカに磨き上げ、その中に、ふじみ野キャンパスの学生が書いた１０００枚以上の応援メッセージや、教職員からの文房具を入れ、ランドセルの１個ずつを丁寧にビニールの袋でくるむ作業に黙々と勤しみました。

代表の山田康平さん（同学科４年）は「東日本大震災で被災され、不自由な生活をされていらっしゃる方々のために、僕たちも何かをできないかと模索して、この活動に取り組みました。最初は、ふじみ野に避難している15人の子どもたちのランドセルを確保することを前提に、５００個を目標にしましたが、１０２４個も回収でき、本当に驚きました。市内小学校の校長先生方が僕たちの活動を支えてくださったので、とても感謝しています。保護者の中には、『何かできることはないか』とセンターに問合せしてくださる方もいらっしゃいました。ランドセルに入れるメッセージは、センターで推進している『ゾウさんペーパー』（ゾウのフンから作った紙）に書いてもらうつもりでしたが、ランドセルの数が多くて間に合いませんでした。地元運送会社の経営者からお借りする４トントラックでランドセルを運びますが、子どもたちが喜んでくれるといいなと思います」。

さて、いよいよ４月８日の夜。ふじみ野市で運送会社を経営されている大山敦夫さんのトラックにランドセルを積み込み、大山さん、「クムスタカ・リンク」「ＮＯＲＡ」の小林久美さん、作美幸宏さん、４年生の白木秀明さん、小田真也さん、内山有菜さん、３年生の吉池和代さん、２年生の中田緑香さん、外国語学部１年の長谷部功さん、同センターの森下英美子研究員が宮城に向かいました。同研究員の子息・翔さん（東京電機大学大学院２年）も助っ人で参加しました。

９日朝、仙台の倉庫にランドセル９００個を預けました。その際、文京メンバー全員で倉庫からの荷出しを手伝ってスペースを空け、そこにランドセルの箱を入れさせていただきました。このランドセルは、11日に福島県相馬市に運ばれ、現地のボランティア組織「相馬会」の上村剛が快く受け入れてくださいました。

その他の約１００個は、10日の朝、気仙沼の被災地まで運びました。ワゴン車２台と軽トラックに分かれ、ランドセルと生活支援物資を乗せて寸断された道をたどり、避難所めぐりをしました。ランドセルは、町の支所、支援物資受付窓口、避難所等に少しずつ分けて配ることができました。生活支援物資や文房具、被災地では手に入りにくい野菜や果物、床に毛布がつらいという方への布団セットも運びました。

学生たちは、避難所や町で出会う人たちと出来るだけ話をするように心がけました。先行して現地に入っていた学生中心で発足したボランティア組織「まさか」の矢部寛明さんに、「話をすることが良い支援になる」と聞いたからです。それでも、人と話すのが得意な学生でも言葉につまったり、「涙を見せることは逆効果」と聞いていたのに被災者の前で泣いてしまったりという経験をしたそうです。被災地のがれきの山や、道路に乗り上げている船の現実のものとは思えないくらい巨大でリアルな様子、１カ月経つというのに、まだ、電気も水道もガスも復旧していない生活を目の当たりにしたことが、言葉も出なくなるくらいに学生たちに影響を与えたようです。

宿泊先は、気仙沼の「ホテル望洋」。建物が残っていたため、私設の避難所として開放されていました。ボランティアも無料で宿泊させてくださいますが、文京一行は「現地でお金を使うことも経済を回すための支援のひとつである」と考え、各自が出せる金額で宿泊費を支払いました。ホテルのご主人・加藤英一さんからは、とても丁寧なお礼の電話があり、「こうやって人と人とのつながりを感じられることが、災害の中で得た良いことだ」とおっしゃっていたそうです。全国にいらっしゃる泊り客や、たった１泊のご縁であった方からも、応援のメッセージや支援が届いたのだそうです。

一行は10日、未舗装の山道を迂回しながら、終電５分前にふじみ野駅へ到着というハードスケジュールをこなしました。帰京後、メンバーは軽いＰＴＳＤ（心的外傷後ストレス障害）を発症したらしく、「角を曲がると、がれきの山かもしれない」と思うこともあり、被災地へ行く前には感じたことのない錯覚にとらわれるようです。

13日に本学関係者で開催したふじみ野キャンパスでの緊急報告会には、これまでバックで活躍してくださった地域の鈴木啓太郎さん、小川愛子さんも駆けつけてくださいました。

第２陣は、農業に関する知識を広める事業「グリーンツーリズム」でおつきあいのある福島県逢瀬町の野菜を、「風評被害から守る作戦」として考案中です（記事協力＝森下研究員）。

被災地の子どもたちを思い、黙々と作業したメンバー

仙台の倉庫で物資の荷出し作業を手伝う文京生

１０２４個のランドセルは圧巻！